会議内容報告
「こども食堂円卓会議～こども食堂の今について～」

１　**開催日時**　令和元年 12 月 11 日（水）14：00～16：00

２　**場　　所**　教育文化会館　３階第１研修室

３　**目　　的**

円卓会議は、子ども食堂に関心を持つ各種団体、市民の方々が集い、子ども食堂のしくみや今後の方向性について話し合うこと、子どもたちの居場所づくりの知恵を出し合い、情報交換をし、互いの強みを生かしあえるネットワークをつくることを目的にします。

４　**当日参加者　21 人**

５　**プログラム**

14：00～14：05　はじめのあいさつ
14：05～14：25　「橋本市の子ども食堂の現状について」
　　橋本市子育て世代包括支援センター　木下昌美
14：25～14：45　「和歌山県子どもの生活実態調査報告」
　　和歌山県子ども未来課　坂口義明氏
14：45～15：25　「こ・はうすの取り組みについて」
　　こどもの生活支援ネットワーク　馬場潔子氏
15：25～15：35　子ども食堂についての提案（現子ども食堂実施者の方より）
15：35～　　参加された方の意見、感想

６　**円卓会議の意義**

大切なことは、自由、活発、協働。職種や肩書きは関係なく、これからのこども食堂のこと、子供たちを支援する居場所のありかたについて語り合い、実践につなげます。

７　**会議進行記録**

（1）あいさつ（吉田　健康福祉部長）

（2）橋本市の子ども食堂の現状について
（橋本市子育て世代包括支援センター）
別紙資料に沿って説明

（3）和歌山県子供の生活実態調査結果について（和歌山県子ども未来課）
別紙資料に沿って説明

（4）「こ・はうす」の取り組みについて

（子どもの生活支援ネットワーク　こ・はうす　馬場　潔子氏）

【活動のきっかけ】

家庭の経済力次第で子どもの進路や生活体験が変わってしまうと感じたこと

→地域で出来る子どもの支援　「こ・はうす」2015 年１月よりスタート

【活動の方針】

〇無理をせず、出来る範囲のことで、小さくて良いから日常生活を支える活動をする。

〇自分たちが出会える子どもはほんの少しだから、この活動を通して地域全体に発信し、少しでも貧困問題の解決に役立てればという思い。

【基本的な活動】

〇主に２つ。

① 「こ・はうす」民家を借りて、毎週木曜日に活動。16 時頃にご飯を作り始める。徐々に子どもたちも集まり 18 時にご飯。思い思いに過ごし、20 時に帰宅。

② 「こむすび塾」コミュニティセンターにて活動。おにぎりと具沢山味噌汁というシンプルな食事をし、勉強する。

〇単発の企画（予算やボランティアの関係もあるので出来るときに）

〇お寺おやつクラブのおすそ分けのおすそ分け

→家庭的に厳しい子たちのもとへ、少しでも来てもらえるようにこちらからアプローチ。

〇子ども達が入り浸れるおばちゃんの家のような、実家のような場所になれるように活動。

【運営について】

〇学生スタッフ、ボランティアに保障（謝金や交通費支給、食事の提供やおすそ分け）

→続けて来てもらいたいから少しでも持ち出しや負担がないように配慮。

〇寄付を募る→活動を知ってもらうためニュースの発行、フェイスブックの更新。一筆箋の製作。

〇困っている家庭とつながるために、支援の視点を持っている人たちに、こ・はうすの存在を知ってもらう。

【近隣住民、行政とのかかわり】

〇近隣の方から食材の差し入れ→それによりメニューを決める。

〇コミュニティセンターの使用料を免除。市のホームページでの活動紹介。行政窓口に発行しているニュースを置いてもらう。

【普段からの関係作り】

〇家庭の問題は困難が重なったときに深刻になる→少し様子が変わったときに声をかけら

れるような関係性を築いておく。子ども食堂を通して、子どもや家庭の孤立を防ぎ、困難がより深刻な事態になるのを防ぐということ、地域の拠点作りになるといったことは出来る。

【こども食堂の様子】
〇ひとしきり大人にくっつく時期があり、知らないうちに離れていく→子どもが甘えるのは親以外の大人でも大丈夫なのだということ。

【スタッフについて】
〇大学生だけでなく、若手社会人も加わってくれており、スタッフにとっても良い居場所となっている。
〇子どもたちに接するだけではなく、大人同士の交流も生まれてる。

【安心できる場所をつくるために】
〇否定せずにおしゃべりを聞くこと→支援する支援されるの立場ではなく、同じ目線で。
〇ノルマも評価もない場所→気楽に子どもが安心して過ごせて、ご飯を美味しく食べられるということが目標。
〇無理をしない→出来ることは限られていて、ボランティアは万能ではないのだから、自分たちで出来るところは頑張って、国や行政などそれぞれの役割があるので、みんなで連携し、協力する。
〇ボランティアの資格があるとすれば、子どもと過ごす時間を楽しめるということ。子どもの成長を感じ喜べることが幸せである。

<こ・はうすの活動に対する参加者の感想>
〇こども食堂に対する取り組み、その中での気づき本当に素晴らしい。経済的困難を解決できないとおしゃっていたが、そんなことはない。県の調査も素晴らしい。経済体制を覆さないと解決できないと思うが、解決する方法が見えてきた気がした。こういう分析があると言うことは、当然政策立案されていうると思う。ぜひ進めていってほしい。

〇私がまさに考えていた子ども食堂の形。今自分がやっているのはコミュニティホール。子ども、親、地域のお年寄り、いろいろな人が来る。７０人規模のコミュニティ。
大阪や東京で始まったのは、貧困対策というところから。
地域のコミュニティセンターとしての子ども食堂は趣旨が違うといって、手伝いに来てくれない人もいる。ボランティアを集めるのも大変
平均年齢７０歳ちかいけども、そんなスタッフで 70,80 人近くの食事を作る。けれど、子どもや親が来てくれる、いろいろな人が来てくれるのが、やっていて良かったと思う点。

（5）巡回子ども食堂の提案（現子ども食堂実施者の方より）

【提案事項】

それぞれの地域で子ども達が利用できる食堂があればという思い。子ども支援に関心のある方々と一緒に子ども食堂がない地域に出張する形で「巡回子ども食堂」を運営していきたい。それを子ども食堂または地域食堂として定着させ、市の地域支援の場を増やしていきたい。この思いに賛同してくださる市民の方々を募集します。

（6）まとめ（和歌山大学：越野先生）

和歌山県の子どもの生活実態調査の中で、「経済的に厳しい家庭の方が生活習慣が崩れている」という結果から、だらしないとか教育熱心ではないというイメージをもたれるかもしれないがそういう訳ではない。経済的困難な家庭のほうが土日も働いて労働時間が長いという、「時間の貧困」という状態の場合もある。その結果、家で子どもに手をかけられない、気をつけてやる時間がないという状態になっているケースがあるということを理解しておく必要がある。

また、子ども食堂は貧困対策なのか、地域づくりなのかという議論があるが、両方の側面を持っていていい。この二つは対立するものではない。

橋本市の取り組みは先進事例である。今後もどういったことで子ども達が困っているのかを吸いあげてほしい。「子どもの貧困対策推進法」の改正があり、市町村の子どもの貧困対策推進計画の策定について努力義務(※)になったが、このような場での経験をぜひ反映していってほしい。

（※）橋本市では、子ども子育て支援計画のなかで「子どもの貧困」と言う項目を新設する予定